

横並びのセオリーに疑問を持ち、同じことをしないことで形作られてきた企業がある。日本全国で輝く、そんな企業をお訪ねする。



是吉興業株式会社取締役社長
向川是吉氏

◎専心企業ファイル④

これですべてのこと

柔軟で力強い身体づくりで スポーツ業界の底上げを狙う

昭和四十七年、埼玉県出身。サッカーの名門・武南高校でゴールキーパーとして活躍し、青山学院大学へ入学とともにスノーボードのアルペン種目（滑降・回転）に転向。平成十四年、三十歳の時に世界ランク四十一位、日本三位。ソルトレイクシティ・オリンピックを前に選手生活を引退。NTTコミュニケーションズ（株）の契約社員で拠点営業トップとなり十五年、法人化（元スノーボード選手三人で起業。十八年、トレーニング機器製造と直営ジム開始。事業を一本化した翌十九年、売上げが一億円を超えた。是吉興業サイト
<http://www.hogeirei.com/>

取材・文 本多容子

昭和三十七年生まれ。市場調査、ビジネス誌編集を経て、平成九年からフリーランスで活動中。

動けぬ体をつくってしまった。

そこで全く逆の発想のトレーニングを半年試みると、成績が急上昇。この経験を胸に秘め、引退後NTT代理店として起業し、三年で売上げ一億円寸前にまでいった会社を、トレーニングマシンメーカーに変えたのだ。

疑問と悔しさバネに

向川氏の選手経験は、二つの思いに収束されるという。

一つは「効率が悪い既存の筋力トレーニングへの疑問」。二つ目は「トップクラスにいくほど資金づくりに追われ、練習できなくなる矛盾への憤り」だ。

「過去の自分と他の選手のトレーニングは、あまりにも非効率だった。今も、『身体の動き』を切り口にしたトレーニング法は主流ではない。この不合理を変



(右) 腕と肩の可動範囲を広げる「ディッピング」マシンはプロ野球球団が採用、一般企業の休憩所にも入り始めている
(左) 「スーツで15分」掲げる直営ジムは日本橋、神田、八丁堀の駅近く。OLやサラリーマンとスポーツ選手が入り混じって、黙々とトレーニングしている

NTT代理店業時代、クレーム件数の少なさで表彰された。スタッフは、情報共有ボードで担当外でも各部署の進行を確認し、いったん引き取って業務を前進させる



えたい」という向川氏がたどり着いたのが、「関節の可動域を広げ」「筋肉の柔軟性を高め」「使える神経系統を増やす」という三ステップだった。

さらに資金づくりに追われ、練習できずにいた経験から、「選手の手も変えたい」と、スタッフに現役選手を積極採用しているのだ。空き時間にマシンを自由に使用せ、勤務に柔軟性を持たせることで、競技と仕事を両立できる環境をめざしている。

しかし、ベンチャー企業が選手を抱えるのは難しい。選手のところは「スポンサーは選手にすべてを与えるべき」と考えたが、「会社では、選手も仕事上の生産性を生んでほしい。これが経営者の希望なのです」。

選手と経営者の経験から出した結論は「選手だからより仕事できる」という構図をつくってほしい」というものだ。彼らは皆、一般の人がしない選択、経験をしてきているのだから。しかし選手なら皆、氏のよう

に開拓営業できるだろうか。「簡単にはいきません。選手の間も、社会的な能力を卑下しがちなのです。まず自力でその壁を乗り越えてもらわないと」

「力を抜いて」メーカーに言う

トレーニング事業を始めるにあたり、機器を自作するか否かを、大学の後輩でもある副社長とさんざん話し合った。

誰に相談しても「メーカーだと製造物責任を取られる。機械は工場に造ってもらい、買うだけにすべき」と言われた。

しかし、トラブルがあればつくる側に責任を押し付ける態度は、自分が顧客なら嫌だ。ちゃんと責任を負おう」

責任とは、リスクだけでなくビジネスの決定権そのものなのだ。

「腰痛治療の名医の悩みを伺って、高齢者向けに改造したモデルを納めたら、もうできたの」と驚かれた。それもこれもメー

カードからできることです」

しかし、ここまで苦労して造った機器の名前が「ホグレル」である。「肩の力を抜く」ことが優先されているのだ。

販売姿勢にもこれは現れる。全国の整形外科、介護施設にも導入されている機器は、是吉興業がトレーニングの基礎を学ぶセミナーから、運動療法の運用方法、姿勢・動作などの実践的セミナーなどしっかりサポートするが、基本的に導入先は「自由に」使うことができる。だから「フィードバックがどんどん来ます」（向川氏）。顧客に使い方を提案されることもある。つい先日介護関係の顧客が、新しい使い方をスタッフを被験者に提案してくれたばかり。

「経営は山登りと一緒。登り始めはきついですが、登ったからこそ見える景色がある。現役時代、度胸があつたが安定感を手に入るまではいかなかった。今は問題をクリアしながら、一歩一歩、山を登る感覚があります」